



正月が終わったと思ったら、2月も中旬。メジロが庭先に頻りに訪れるようになった。春はすぐそこだ。「二月は逃げて走る」は月日のたつのが特に早く感じられるという意味だが、「逃げる」には2月の日数の短さも含まれているのだろう。閏（うるう）年でも29日と他の月より2、3日短い。

閏年は地球と太陽との関係で生まれたものだ。1年は地球が太陽の周りを一周（公転）し、再び元の場所に戻るまでの期間。実際はちょうど365日ではなく365.24219日と端数がある。し

2017.2.12



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

二月は逃げて走る

たがって、1年を365日とすると毎年約6時間分の公転が不足するので、4年ごとに2月に1日分の24時間を加えて29日（閏年）としている。さらに西暦が100の年は2月を28日と調整する。

この2月は雪が一番降る月だ。水戸の「雪日数」の平年値を調べると、1月（3.6日）、2月（4.2日）、3月（2.6日）と確かに多く、毎週降るペースだ。ちなみに関東地方の沿岸にある横浜や東京でも同じ傾向。

沿岸部に雪をもたらす典型的なパターンは、先日のように「南岸低気圧」が本州の南岸を東進するケースだ。雪か雨かは、低気圧のコースやスピード、上空の風・気温・湿度に微妙に依存する。上空と地上の気温がほんの1、2度高いだけで雨になってしまうほどで予測も非常に難しい。

（元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住）



2月9日は朝から県北を中心に大雪に見舞われた。水戸で12センチ、大子で15センチなどの積雪があり、大雪警報も出された。しかし鹿行の神栖や潮来は雨で、鹿嶋あたりが境目だったようだ。

このような雪や雨をもたらす低気圧は「南岸低気圧」と呼ばれる。普通の低気圧の発生やコースと異なって、台湾付近で生まれて東進し、ほぼ24時間後には関東の南岸に達する。今のようにスパコンを用いて物理学に則した「数値予報」がなかった時代の有力な経験則の一つだ。

雲は上空で水蒸気が凝結して生まれる微細な

2017.2.19



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

南岸低気圧

水滴で球状の雲粒だが、雪の場合は氷粒だ。しかも単なる氷粒ではなく水蒸気が昇華などで成長した結晶で種々の形がある。落下して地面に達するのが雪（雪片）で、写真は結晶の一例。

結晶の形は雪が生まれる時の温度と湿度で決まる。柱状、針状、板状などさまざまだが、気象学者の中谷宇吉郎は温度を横軸に、湿度を縦軸に取った図に整理した。「中谷ダイアグラム」と呼ばれる。中谷は「雪は天（そら）から送られた手紙である」という名言を残したが、結晶を見れば雪の故郷が分かるという意味だ。

南岸低気圧は2月のみならず3月でも襲来し、関東沿岸に思わぬ雪をもたらす。低気圧は温暖・寒冷前線と特有の雲を伴うため、よく観察すれば予測も可能だ。「雲は空の顔」と言える。

（元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住）